

第 2 回熊本大学デジタルアーカイブシンポジウム

概要

日時：2021 年 4 月 30 日（金）14:00～16:00

参加者数：65 名

開催方法：ZOOM でのオンライン形式

概要：第 1 部は熊本大学永青文庫研究センター稲葉継陽センター長による基調講演，第 2 部はパネルディスカッションの 2 部構成で開催した。

講演内容

【第 1 部 基調講演】

「災害史料と現在、そして未来」

熊本大学永青文庫研究センター長 稲葉継陽
稲葉先生には、熊本を統治した加藤家や細川家の資料から民衆まで幅広い史料を有する永青文庫研究センターの資料を用いて熊本の災害についてお話頂いた。主な内容は以下の 4 点であった。

1. 地震発生の長期傾向の把握
2. 先人たちの地震体験と対策
3. 先人たちの災害・復興経験とその歴史化
4. 土地利用の歴史的経緯と防災

歴史資料の整理し、作成された地震年表からは 1619 年以降地震は複数年にわたって連続的に発生しており、現在でも熊本地震活動の真っ只中であることをお話頂いた。また細川忠利 3 代目細川家藩主の「少し々切々」揺れるという生々しい地震の様子や「地震屋」を建てたい意向、本丸に住まわず花畑屋敷で生活するようになったという、地震が熊本城の利用に影響を与えたことなどを報告頂いた。

【第 2 部 パネルディスカッション】

「災害遺構・史料からの学び」

○登壇者

小川久雄 熊本大学 新学長

稲葉継陽 熊本大学 永青文庫研究センター長

竹内裕希子 熊本大学 デジタルアーカイブ室長

○コーディネーター

田中尚人 熊本大学 熊本創生推進機構

○内容

循環器医療がご専門の新学長小川先生からは、すさまじい数の余震に見舞われ、車中泊を余儀なくされた熊本市民が罹患した「エコノミー症候群」に対して、熊本大学がオール熊本で対処した実践について、お話頂いた。稲葉先生からは、日頃からのネットワークが生き、失われ易い在野の「文化財レスキュー」活動が、熊本地震の際に公民連携により可能となったことが紹介された。

パネルディスカッションでは、60 名を超える参加者の皆様からも、チャットを通じて、ご意見を頂き、「文理融合で、災害の教訓を次世代に活かすことに賛成」、「オール熊大で、熊本市民の方々と、心のケアなども含めて災害に備えたい」などの声をお寄せ頂いた。

TERADA の活動テーマである「データと人をつなぐ」、「できたこととできなかったことをつなぐ」、「現場と教育をつなぐ」について、有意義な対話を行うことができた。

